

これからインターネットの話をするのだけれど、自分には関係ないことだと目をつぶらないでほしい。私もインターネットに明るいわけではない。それでも私がインターネットを話題にするのは、これからの俳句の「場」について考えるためである。

グーグルというアメリカの会社をご存知だろうか。スタンフォード大学の二人の大学院生が設立してまだ十年に満たないのに、時価総額は既に二十兆円を起え、日本企業トップのトヨタ自動車と肩を並べる。いかにものすごい勢いで成長しているかがわかるだろう。

グーグルの事業の中心はインターネットの検索サービスである。検索したい言葉を入力すると、その言葉を含むインターネット上のすべての情報が、コンピューターが有益だと判断した順に並べて表示される。グーグルは企業からの広告料などで収入を得るので、利用料金は無料である。ために「俳句」で検索すると○・○四秒後に一、一一〇万件の情報が集められた。文科系の私には、このような神業がどんな仕組みで成り立っているのか見当がつかない。ちなみにトップに表示されたのは「ウィキペディア」というインターネット上の百科事典の「俳句」のページ、次は「おくいお茶新俳句大賞」の受賞作品発表のページだった。

『ウェブ進化論』（梅田望夫著、ちくま新書）という本によると、グーグルの理念は「世界中の情報を整理し尽くす」とだそう。インターネットが本格的に普及し始めてまだ十数年。インターネットにつながる情報は、さらに飛躍的に、果てしなく増殖していくはずである。世界の検索サービスの六割のシェアを有するグーグルならば、あながち大げさな理念だとも言えない。

「小川軽舟」で検索してみると、ささやかながら六五六件の情報が引き出された（ささやかというのは謙遜ではなく、例えば「金子兜太」で検索すると情報は五万件を超える）。六五六件の情報のうち、かなりの数にのぼるのがブログだった。ブログというのは個人が手軽に作れる日記風のサイトで、総務省の統計によると登録者数は平成十八年三月末現在で八六八万人にのぼる。そのいくつかに私の俳句や評論の感想が書かれていたということだ。初めてそのような情報に接した時、私はとても新鮮な感動を覚えた。それはすなわち私の読者に会えた感動である。

俳句という文芸においては、読者の役割がたいへん重要である。句会と結社という俳句の基本的な「場」は、俳句が読まれ、読まれた結果を作者が知るためのものだ。総合誌も俳句が読まれるためにある。しかし、基本的には作者から読者への一方通行であって、読者の反応は聞こえてこない。俳句にせよ、評論にせよ、暗闇に向かって呼びかけているような心もとなさなのだが、あるとき遠くから返ってきた。そのようなにしてブログに見出した読者の声に、私はぜひぶん励まされた。インターネットの検索サービスがなければ、私はこの読者には会えなかったのである。

「週刊俳句」というブログがある。これも「小川軽舟」の検索結果六五六件の中に入っていた。ブログの機能を利用しているが、毎週日曜日に新しい号が追加される雑誌風の構成をとっている。さいばら天氣が平成十九年四月に「創刊」したものだ。インターネットと俳句の関わりは今に始まったことではないが、この「週刊俳句」はインターネットらしさという点で画期的なものだと私は思う。それは、一つにはオープンであること、一つには無料であることだ。

インターネットには、結社のサイトもかなりある。それらはおおむね結社の広告を目的に作られているようだ。結社誌のさわりなど見せて、仲間になろうよと呼びかける。つまりそれは、インターネットのオープンで無料の世界から、結社という閉じた有料の世界への誘いなのである。

さいばらは創刊準備号の後記にこう書いている。

《基本は「書きたい人が書きたいことを書きたいときに書く」。ここに「党派」はありません。『週刊俳句』は

同人でも集団（グループ）でもなく、組織ですらあり

ません。「場」を用意してみた、ということなんです。》

「場」の提供者としてのさいばらは、これが同人誌的な閉鎖性に陥らないよう苦心しているようだ。「総合誌を読む」という欄を設けて、既存のメディアにきちんと向き合う。その一方で、俳壇や結社という枠組みに収まらないさまざまな活動を包容する。俳句において出来上がった秩序とその外に生まれた新しい動きとの交差点のような「場」を指向しているのだろう。

公募で行われた「週刊俳句賞」は、八田木枯、対馬康子、筑紫磐井、斎藤朝比古、權未知子、石田郷子という俳壇の人々を特別審査員に迎えつつ、その採点に応募者の互選と読者投票の結果を合わせて受賞者を決めている。インターネットの機能を生かして、俳句のオープンな「場」を提供する

「週刊俳句」らしさの出した企画だった。

『ウェブ進化論』で梅田は、「次の一〇年への三大潮流」として「インターネット」「チップ（低価格）革命」「オープンソース」を挙げる。オープンソースとは、平たく言うと公開された場で大勢の無賞の協力によって知的資産が作られること。インターネット上の無料の百科事典「ウィキペディア」も、そのようにして作られている。「週刊俳句」はまだ小さな試みだが、オープンで無料というコンセプトは、「次の一〇年への潮流」にちゃんと乗っている。

俳句の「場」は、これからどうなっていくのだろうか。『俳句研究』の休刊は、総合誌という「場」の置かれた難しい状況を物語っている。休刊前の最後の号（平成十九年九月号）には俳人六百人のメッセージが掲載されたが、俳句の「場」をめぐる興味深いコメントがあった。

加藤かな文は、『俳句はいろいろな場所にある。句集、総合誌、結社誌、新聞の投句欄、お茶の缶、ブログ。「俳句研究」という場所にあった俳句はどこに行くのだろうか。そもそも、俳句はどこにあるのがいちばん望ましいのだろうか』と問う。藺草慶子は『結社の時代から超結社の時代へ、そして総合誌の時代から同人誌、ネットの時代へ移行しつつあるような現代。総合誌すら同人誌化傾向を感じたのは私だけだろうか』と書いた。総合誌の同人誌化傾向とはどういうことか。総合誌が俳句や文章を発表する者同士の「場」になって一般の読者が離れていっているということであれば、それはまさしく総合誌の危機を意味するものだろう。

金子兜太は、『俳句（五・七・五の最短定聖詩）はわが国の貴重な民族詩で、一流性と一般性を同時に包容しているが故に、国民文芸と言える』と書く。ここで言う「一流性」と「一般性」は、俳句という詩の待性であると同時に、俳句の世界の成り立ちそのものでもあるだろう。俳句にはその両方が必要なのだ。夏井いつきが『俳句の未来を思うとき、「広げる」ことと「高める」ことは車の両輪であると考える。広い裾野を持つてこそ、山は高く美しく存在する』と言うのは、俳句甲子園を育てた夏井の使命感が、金子の俳句観と一致するところに発していることを示していると思う。

情報の生産、流通において、インターネットが活版印刷以来の技術革新であることは疑う余地がない。それは文化のあり方をさまざまに変えていくことだろう。俳句においても、それは新しい手段ができたということにとどまらず、「一流性」と「一般性」を包含すべき俳句の「場」のあり方そのもの

の変容を迫っていくことだろう。

、私の師事した藤田湘子は、インターネットを嫌った。パソコンも携帯電話も電子辞書も嫌いだった。古い世代だと言ってしまえばそれまでだけれども、湘子はこれらの普及に、俳句にとつての急うさを本能的に感じていたのだと思う。デジタル化されて行きかう言葉は本質的に軽い。その軽さが俳句の性格をも変えてしまうのではないか。そして、インターネットの世界では、俳句を基本的に横書きにせざるを得ない。しかし、先人の名句を横書きにした瞬間に、その格調が決定的に損なわれるのは否定できない。

それでも、私たちはインターネットを受け容れていかなければならない。そもそも、俳句の近代をもたらした正岡子規の俳句革新はなぜ成功したのか。当時の旧派の勢力に比べれば、子規派など物の数ではない。それなのに旧派を圧倒することになったのは、新聞という新しいメディアを押さえたからではなかったか。また、高浜虚子がその後の俳句の世界をリードできたのは、雑誌という近代的媒体を用いて「一流性」と「一般性」を包含する結社という新しいモデルを開発したからではなかったか。

「澤」創刊七周年記念号の「二十代三十代の俳人」特集で、「澤」の若手である相子智恵の評論が特に印象に残った（『われら』の世代が見えない理由―マイクロポップ時代の俳句）。時代背景を踏まえた世代論を展開した後、相子は「若者の俳句活動において、この十年で大きな影響を与えた出来事」として「俳句甲子園の発足」と「インターネットの発展」を挙げ、これらが総合誌や結社誌ではなく周縁のマイナーな立場で起こっていることに注目する。

相子の文章で私が何より感心したのは、インターネット上の新しいコミュニケーションに欠かせないのは個人の「読みの力」ではないかと指摘しているところだ。その「読み」に対する学びが自分には足りないと言う。子規と虚子の新しいモデルが成果を収めたのは、この二人のすぐれた読み手がいたからだろう。相子の認識は俳句の本質を突いている。

私たちはインターネットに怯む必要もないし、また媚びる必要もない。紙の文化がすぐになくなるわけでもない。しかし、少しずつ変わっていくであろう俳句の「場」が、これからもすぐれた作品を生み出すものであるよう、私たちは建設的な態度でこれに向き合わなければいけないのだと思う。